要　　約

報告番号	甲 (乙) 第　　号	氏　名	清　水　智　子

主 論 文 題 名

Grading criteria for disease severity by pemphigus disease area index
（天疱瘡病変領域指数（PDAI）による天疱瘡重症度基準の設定）

（内 容 の 要 旨）

天疱瘡は皮膚と粘膜を障害する稀な自己免疫性疾患である。天疱瘡の治療や臨床研究において、精度•信頼度の高い重症度判定や病勢評価が重要であるが、長年統一された基準はなかった。

本研究の目的は、新しい国際基準である天疱瘡病変領域指数（PDAI）と日本従来の天疱瘡重症度判定基準（JPDSS）、および評価者の主観的重症度判定を比較すること、およびPDAIによる重症度判定基準値を定めることである。

PDAIは2008年にInternational Pemphigus Committeeが提唱した国際的な病勢評価法である。PDAIは皮疹・粘膜疹の範囲を部位ごとに数値化して合計するもので、特徴として評価幅が広く（0〜250点）、重症例のスコアがより高く出るように工夫されている。PDAIによる重症度判定基準はこれまで定められていない。JPDSSは厚生労働省研究班が1993年に提唱したもので、皮膚・粘膜疹の面積、新生水疱数、血清中抗体値などをスコア化したものである。重症度判定基準は５点以下が軽症、６点以上が中等症、10点以上が重症と定められている。簡易であるが、評価幅が狭いことが特徴である。本研究では、久留米大学、奈良医科大学、岐阜大学、慶應義塾大学の天疱瘡患者37症例をPDAI、JPDSS、評価者の主観的重症度（軽症・中等症・重症）にて評価し、総評価数110回分を解析した。その結果、軽症と中等症例ではPDAIとJPDSSは良く比例する（r＝0.63）が、評価幅の狭いJPDSSはPDAI30点付近になるとプラトーとなり、病勢変化がとらえにくいことが示唆された。これより、PDAIはJPDSSよりも特に重症例において病勢評価に適していると考えられた。また、評価者の主観的重症度判定に基づいて解析群を軽症・中等症・重症の３群にわけたところ、PDAIスコアの分布は軽症群（58例　0〜19点　中央値6点）、中等症群（41例　6〜33点　中央値　11点）、重症群（11例　19〜126点　中央値35点）であった。この値を元にPDAIによる重症度判定のカットオフ値の目安をつけた後、感度－（1－特異度）が最も高くなる点を検索したところ、重症度判定の最適値は軽症：0〜8点（感度74.1％；特異度92.3％）、中等症：9〜24点（感度87.8％；特異度76.8％）、重症：25点以上（感度90.9％；特異度98.9％）であった。以上より、今回設定した重症度判定基準は臨床に十分適応できる基準であることが示唆された。

本研究により国際基準であるPDAIによる重症度判定基準が設定されたことは、天疱瘡に対する新薬、あるいは既存治療の効果判定に関する臨床研究を実施する上において有意義である。